慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会構築主義の社会問題論におけるメタファー研究
Sub Title	A critical note on the social constructionist approach to metaphor in the discourse of social problems
Author	本嶋, 学(Motojima, Manabu)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1998
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.47 (1998.) ,p.1- 9
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000047-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社会構築主義の社会問題論におけるメタファー研究

A Critical Note on the Social Constructionist Approach to Metaphor in the Discourse of Social Problems

本　嶋　　学*

Manabu Motojima

Social constructionist researchers have come to focus on metaphor used in the discourse of social problems, as they have tried to elucidate the tacit processes of constructing what is accepted as problematic or non-problematic in the discourse. Their contributions lie in pointing out the generative role of metaphor and the deeper dimensions of the social construction of publicly sustained narratives by classifying types of metaphor—such as generative, surface, and deep metaphors.

However, the social sciences researchers in studying the discourse of social problems have not yet analyzed in sufficient detail the intersubjective phases of constructing persuasive social narratives using the generative rhetorical power of metaphor. This is partly due to the lack of theoretical elaboration on the nature of metaphor and its social use in reference to the intersubjective cognitive processes of shared social semantics for constructing social problems.

This paper attempts to contribute to overcoming this lack by linking the recently developed cognitive semantic theory of metaphor to the social constructionist perspective. First, presenting a critical review of the preceding studies of metaphor used in the discourse of social problems, this paper points out the importance of a set of alternative distinctions of types of metaphor—such as orientational, ontological, structural, and new metaphors—mainly based on Lakoff's cognitive linguistic elaboration on metaphor. In this way, the potential applicability of cognitive semantics to sociologically pronounced discourse analysis is presented. The theoretical focus of the former is inherently grounded within the social context, whereas the preceding social analyses of the discourse of social problems have lacked insight into the importance of the cognitive approach in clarifying the intersubjective phases of constructing social narratives. Finally, this paper suggests the necessity for further research covering a wider range of discourse case studies for understanding the significant role of metaphor in constituting the discourse of social problems.

1. はじめに

「…にメスを入れる」「氷河期」「対症療法」「処方箋」「氷山の一角」。これらは，いずれも社会問題を報道する際にマス・メディアがメタファー（的表現）として多用する語彙で，社会問題のイメージ形成に一役買っている。

* 東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻博士課程（社会問題の社会学・レトリックの社会学）

近年，こうした社会問題ディスコースのメタファー[1]に関する研究（以下，「メタファー研究」と略す）が，「社会問題はクレイム申し立て活動によって構築される」という理論的定式化に端を発する社会構築主義の社会問題論，特にそのレトリック研究の一環という形で少しずつ進められている。例えば，G. Fine と L. Christoforides [1991] 等がその主立ったところである。彼らの「メタファー研究」をはじめ，既存のそれらは，社会問題の構築過程におけるメタファーの役割の解明にそれなりの成

果をあげている。

とはいえ，それらが，十分に満足のいく形でなされているわけではない。なるほど有意義な事例研究が，次第に積み重ねられつつある。だが，残念なことに，それぞれの研究成果が別個に報告されるだけで，その総括が全然なされていないために，個々の具体的な社会問題についての理解は深まったかもしれないが，社会問題とメタファーの関係について，全体として，具体的に何が解明されたのかすら，定かではない。

本稿は，こうした既存の「メタファー研究」の理論的整理から出発し，社会問題ディスコースのメタファーの見取り図を描くとともに，既存の「メタファー研究」の問題点を詳らかにし，これを改善することを試みる理論的研究である。その構成は次の通りである。まず，既存の「メタファー研究」の成果を概括する。次に，本稿の分析枠組みとなる認知言語学者 G. Lakoff たちの認知意味論的メタファー理論 [e.g., Lakoff and Johnson 1980; Lakoff 1986 (1) (2); Lakoff 1987; Johnson 1987; Lakoff and Turner 1989; Lakoff 1993] の一部を見る。続けて，これを拠り所に，社会問題ディスコースのメタファーの諸相に説明を加えつつ，既存の「メタファー研究」の問題点を明らかにし，これを改善することを目指す。最後に，既存の「メタファー研究」を総評し，「メタファー研究」における本稿の位置を確認した上で，本稿の問題点を簡潔に指摘する。

2. 「メタファー研究」の現状

「メタファー研究」が登場する主な背景となったのは，社会構築主義の社会問題論におけるレトリックの役割への問題関心である。こうした問題関心は，例えば，J. Kitsuse の一連の理論的展開 [e.g., Spector and Kitsuse 1977: 訳 148-149, 279; Ibarra and Kitsuse 1993]，J. Gusfield の「飲酒運転」問題の研究 [Gusfield 1981→1984]，J. Best の「行方不明の子ども」問題の研究 [Best 1987] 等，多くの社会問題研究の中にはっきりとうかがえる。それらの焦点は，大筋のところ，クレイム・メーカーが問題定義の妥当性/非妥当性をオーディエンスに説得する技法（レトリック）に置かれている。

ところが，メタファーは，古くから一般にレトリックの一つに数えられてきたにもかかわらず，なかなかそれにふさわしい扱いがなされてこなかった。社会学と詩 (poetry) の間に距離があることが，その一因と目されている [Fine and Christoforides 1991 : 388]。だが，近年になって，ようやく少しずつ，「メタファー研究」—それぞれメタファーの役割への問題関心のレヴェルはさまざまだが—が現れ始めている[2]。三つの代表例—(Ⅰ) [Fine and Christoforides 1991] (Ⅱ) [Navon 1996] (Ⅲ) [Schön 1979→1993]—を通じて，これまでの「メタファー研究」が具体的に何を解明したのかを見てみよう[3]。

(Ⅰ) [Fine and Christoforides 1991]: 1850 年代の初めに害虫駆除の有効な手段としてアメリカ東部の主要都市に輸入された「イギリスすずめ」は，70 年代の中頃には，アメリカの生態系に対する脅威として認知され始め，保護派と撲滅派の論争の火種となった。そんな中，80 年代に，撲滅派は，イギリスすずめを，同時期に社会問題化していた「新移民」(極東，南欧，東欧からの移民) になぞらえた。その結果，イギリスすずめは，「アメリカの鳥たちを攻撃し，不道徳で，外敵として排除されるべき移民」として意味づけられた。結局のところ，撲滅派がこの論争に勝利し，イギリスすずめは鳥類学上，生態系を脅かす問題であるという合意が形成され，撲滅政策が施行された。Fine と Christoforides は，新たに創発しつつある社会問題（例：ここでいうイギリスすずめ）をそれとは別のよく知られた問題（例：ここでいう新移民）に接続するためのメタファーの使用を「メタファー的結合 (metaphorical linkage)」と呼び，これを，新たな問題に対する，持続力を持ったパースペクティヴや劇的なイメージを帯びたパースペクティヴを可能にする一つの手段と見ている [ibid.: 376]。

(Ⅱ) [Navon 1996]: タイでは，「醜い」「貧しい」「孤独」といったスティグマを付与されていたハンセン病のスティグマ除去キャンペーンが，ハンセン病の医学的・リハビリ的治療が改善され始めた 1970 年代以来，実施されていた。にもかかわらず，村八分や社会的降格を言い表わす，ハンセン病のメタファー的使用に由来するスティグマ付与メッセージ[4]は，ハンセン病を通常化する医学的メッセージ[5]に影響されず，命脈を保った。L. Navon は，その理由として，次の三つの点をあげている。(1) ハンセン病メタファーは，村八分や社会的降格といった他の現象を特徴づけるために使用されるので，現存するハンセン病患者をめぐる言説から乖離しているという点。(2) ハンセン病と，村八分や社会的降格といった他の現象を結合しようとするメタファー的分類の論理は，ハンセン病とそのスティグマを付与された状態を区別しようとする科学的分類のそれとは逆であるという点。(3) メタファーは，医学的メッセージとは違って，アプリオリに経験的現実の真なる描写とは見なされておら

ず，検証を必要としているとは考えられていないので，ハンセン病メタファーに由来するスティグマ付与メッセージも，「議論に対して抵抗力のある真理」として受け止められているという点がそれである。だが，ハンセン病の治療状況が改善されるにつれて，ハンセン病メタファーに由来するハンセン病の否定的イメージが，目に見える症状もなく，普通の生活を営むハンセン病患者の現実と食い違うようになるために，人々は，彼らをハンセン病患者と見なし難くなり，スティグマを押しつけなくなり始めるとNavonは結論づけている。

（Ⅲ）［Schön 1979→1993］: アメリカでは，1950年代に，「健康/病気・生成メタファー (generative metaphor)」を基礎に置く「荒廃と改造」という「問題設定物語 (problem-setting story)」が，都市改造という考え方が全盛期を迎えた当時の都市住宅政策を支配した。この「健康/病気」メタファーを通じて，かつて「健康」であった共同体が，「生まれつきの病気に罹っている」スラムになったと診断され，共同体が「健康」であるためには，組織的・安定的計画の下で共同体全体を再設計する都市改造が不可欠であるという処方箋が書かれた。これに対して，60年代には，「自然/人工・生成メタファー」を根底に据える「自然共同体とその移転」という「問題設定物語」が，こうした都市改造という考え方に反旗を翻した。この「自然/人工」メタファーを通じて，逆に，スラムは，家庭のような安定感と打ち解けた助け合いの関係を持った「自然共同体」であり，人々をその土地から移動させ，スラムを破壊する都市改造は，スラムに対する脅威であるという診断が下され，人々をその土地から移動させることについて再考することが必要で，「自然共同体」は保護されるべきであるという処方箋が記された。D. Schönは，社会問題のこうした診断と処方箋が，上述のように，「健康/病気」や「自然/人工」といった慣習的・規範的観念に根ざした生成メタファーによって明白にされる一方で，「A」を「B」として見る生成メタファーは，「A」(例：ここでいうスラム）の重要な側面を無視したり，歪曲したりしうると指摘し，社会問題の診断と処方箋が帯びる，誤謬含みのこうした明白さを解体するためには，問題設定物語の基底にある生成メタファーの意識化が必要であると力説する。そして，Schönは，こうした生成メタファーを意識化するためには，問題設定物語の既知の事実から生成メタファーを再構成しなければならないとした上で，こうした再構成過程において，「表層メタファー (surface metaphors)」と「深層メタファー (deep metaphors)」を区別することの重要性を強調する。ここでいう表層メタファーとは，物語の表層の言語表現として顕在化しているメタファーであるのに対して，深層メタファーとは，表層メタファーを含む物語の源泉として潜在化しているメタファーである。問題設定物語に散らばる表層メタファーを手がかりに，物語を織り成す深層メタファー，つまり，物語の基底にある生成メタファーを再構成することができるとSchönは主張するのである。

これらの代表例をはじめ，既存の「メタファー研究」の成果を要約すると，次のようになる。(1) メタファーは，①新たに現出しつつある問題状況をそれとは別のよく知られた問題状況を通じて認知的・道徳的に分節化する（特にFine and Christoforides）とともに，②そのよく知られた問題状況の現状に関する諸言説から乖離する (Navon) ことによって，また，③アプリオリに経験的現実の真なる描写とは見なされておらず，検証を必要としているとは考えられていない (Navon)[6] ために，その新たな問題状況を間主観的に構成し，それに対する，持続力のあるパースペクティヴや劇的なイメージを備えたパースペクティヴをもたらす。(2) メタファーは，その意味づけ対象である問題状況のある側面を強調する一方で，ある側面を無視したり，歪曲したりする。(3) 問題設定物語は，表層メタファーと深層メタファーという二層からなり，後者は，前者の根源となっている。

だが，こうした既存の「メタファー研究」は，ある重大な問題点を胚胎している。結論の一部を先取りして言うと，現下の問題状況の諸次元に影響を及ぼし，その問題状況を間主観的（説得的）に構成していくメタファーの働きが，十分に把握されていないのである。われわれは，Lakoffたちの認知意味論的メタファー理論を拠り所に，社会問題ディスコースのメタファーをより包括的に説明しつつ，既存の「メタファー研究」のこうした問題点を明らかにし，これを改善することを企てたい。では，本稿の分析枠組み，Lakoffたちのメタファー理論の一部を見てみよう。

3. Lakoffたちの認知意味論的メタファー理論

メタファーと言えば，一般に芸術的文彩といった印象が強く，古くから単なる言葉づかいの問題と見なされがちであった。だが，Lakoffと哲学者M. Johnsonは，こうした古典的メタファー観に代わって，メタファーを思考や行為の問題として考え直す斬新なメタファー観を打ち出した。例えば，「議論は戦争である」というメタファーは，戦争関連の言葉を用いた議論についての表現

というよりもむしろ，「議論の勝敗」「論敵」「議論の戦略」等，議論をめぐるさまざまな思考や行為のレパートリーの源泉である。彼らは，「人間の思考過程は，大部分，メタファー的である」とまで言い張る [Lakoff and Johnson 1980: 訳 7 傍点は原文中のイタリック体][7]。

そんな彼らにとって，「メタファーの本質は，ある種類のものをそれとは別の種類のものを通して理解し，経験することである」[ibid.: 訳 6 傍点は原文中のイタリック体]。例えば，上述の「議論は戦争である」というメタファーは，「戦争」を通した「議論」の体系的理解を可能にする。ただ，こうした理解の仕方は，「議論」の「戦争的」側面を際立たせると同時に，「非戦争的」側面（例：「協調的」側面）を覆い隠す。メタファーが強調する側面を洗い出すことによって，逆にそれが隠蔽する側面を暴き出すことができると彼らは主張し，さまざまなメタファーの強調効果と隠蔽効果を分析している [ibid.: 訳第 3 章]。

Lakoff は，こうしたメタファーをより専門的にこう定義する。メタファーとは，「根源領域 (a source domain)」から「目標領域 (a target domain)」への「異領域間写像 (a cross-domain mapping)」である [Lakoff 1993: 203, 206-207][8]。例えば，「恋愛は旅である」というメタファーでは，「旅」という根源領域と「恋愛」という目標領域との間に，ある種の写像関係（＝対応関係例：「旅人たち」と「恋人たち」の対応関係）が結ばれる。他方，Lakoff は，こうした異領域間写像としてのメタファーとは峻別する形で，言語表現としてのメタファーに相当する概念をしつらえている。「メタファー的表現」がそれで，それは，異領域間写像としてのメタファーが言語表現の形をとって表層に具現したものである [ibid.: 203]。要するに，メタファーが，諸々のメタファー的表現の深層に位置し，それらを体系的に産出するのである。Lakoff と Johnson は，諸々のメタファー的表現を糸口に，潜在的にそれらの基底にあるメタファーに辿り着くことによって，概念体系の在り方を研究することができるとし，さまざまなメタファーの体系を露にしている。

ところで，メタファーの類型には，どのようなものがあるのか。Lakoff と Johnson は，その根源領域と目標領域の内容によって決まる，メタファーの働きに応じて「方向づけメタファー (orientational metaphors)」「存在論メタファー (ontological metaphors)」「構造メタファー (structural metaphors)」「新しいメタファー (new metaphors)」を主な類型として提示している。

まず，方向づけメタファーとは，ある概念を空間（例：「上―下」）的に方向づける役目を果たすメタファーである [Lakoff and Johnson 1980: 訳 18]。例えば，「上機嫌」といった表現をもたらす，「楽しきは上」というメタファーがそれである。

次に，存在論メタファーとは，非物理的で抽象的なもの（例：出来事や活動，感情や考え）を実体 (entity) や内容物 (substance) として見るメタファー（「単純な存在論メタファー」[ibid.: 訳 108]）や，物理的境界がない対象（例：視界）を境界によって「内」と「外」に区切られた「容器 (container)」と見なすメタファー [ibid.: 訳 38, 44-49] である。その働きは，非物理的で抽象的なものを言及可能にしたり，カテゴリー化可能にしたり，数量化可能にしたりする。「心が弾む」といった表現を生み出す，「心は実体である」というメタファーや，「鳥が視界から消えた」といった表現を生み出す，「視界は容器である」というメタファー[9]がその例である。さらに，単純な存在論メタファーの拡張版として，擬人化がある [ibid.: 訳 50-52]。

続けて，方向づけメタファーの「方向」や，存在論メタファーの「実体」や「内容物」や「容器」といった単純な物理的概念よりも，精緻な構造と明確な輪郭からなる概念によってそれとは別の概念を豊かに構造化するメタファーが，構造メタファーである [ibid.: 訳 100-101]。例えば，上述の「議論は戦争である」というメタファーがそれに当る。

最後に，上の三つのメタファーは，いずれも慣習的メタファーであるのに対して，新しいメタファーは，非慣習的メタファーで，さまざまな経験に新しい意味合いを創造的に付与する働きを持つ [ibid.: 訳 203]。「人生は迷路である」というメタファーがその例である[10]。

以上が，本稿の分析枠組みとなる Lakoff たちの認知意味論的メタファー理論の一部である。次に，われわれは，これに基づき，社会問題ディスコースのメタファーの諸相をより包括的に説明しながら，これまでの「メタファー研究」の問題点を露呈させ，これを改善したい[11]。

4. 社会問題ディスコースのメタファーの諸相

本節では，社会問題ディスコースのメタファーの諸相，具体的には，社会問題のメタファー媒介的構築過程の諸次元，並びに，社会問題ディスコースのメタファーの間主観化作用（説得力）について議論しよう。まず，前者を「(Ⅰ) 非実体的状態の問題状況化」「(Ⅱ) 問題状況の精緻化」「(Ⅲ) 悪化傾向にある問題状況の方向づけ」

という三つの次元に区分して，それぞれについて論ずる。次いで，後者，正確には，現下の問題状況を間主観的（説得的）に構成する作用について論ずる。また，これらとともに，これまでの「メタファー研究」の問題点並びにそれが生じた理由について論ずる。

（I） 非実体的状態の問題状況化：Lakoff と Johnson は，非実体的性質を持つ経験の実体化について，次のように述べている。「ひとたび，われわれは自らの経験を実体や内容物と同一視してしまえば，それらに言及し，それらをカテゴリー化し，それらを分類し，それらを数量化することができる—そして，そうすることによって，それらについて推論することができるのである」[ibid.: 訳 37]。すなわち，われわれは，単純な存在論メタファーあるいは容器のメタファーによって自らの非実体的な経験を実体化してはじめて，それらに言及したり，それらをカテゴリー化したりすることができるというのである。

このことは，もちろん，クレイム・メーカーにも妥当する。彼/彼女が，ある想定された実体的状態[12]はともかくとして，ある想定された非実体的状態に問題状況カテゴリー（例：インフレ）をあてはめ，それに言及したり，それを数量化したりする等，それを問題状況としてさまざまに定義するためには，彼/彼女は，その非実体的状態を「単純な存在論メタファー」あるいは「容器のメタファー」によって実体と見なす必要がある。すなわち，これらのメタファーは，非実体的状態を問題状況として定義可能なものにする，クレイム申し立て活動に不可欠の技法なのである。ただし，彼/彼女が，非実体的状態を容器のメタファーによって実体化している，正確には，容器化している場合には，彼/彼女は，その非実体的状態に問題状況カテゴリーをあてはめ，言及したり，数量化したりすることができるばかりか，その非実体的状態に境界線を引き，「内」と「外」に分割することもできる[ibid.: 訳 44–49]。以下の事例では，存在論メタファーが，「イギリスすずめの導入」と「インフレ」を実体と同一視することによって，「イギリスすずめの導入」に言及したり ((a))，「インフレ」を数量化したり ((b))，それが持つ特定の側面を識別したり ((c))，それを一つの原因として見たりする ((d)) ことを可能にしているし，また，容器のメタファーが，「コンフリクト」を容器化した上で，それに境界を設定し，「内」と「外」に分けることを可能にしている ((e))[13]。

(a) *The introduction of these exotics clutters up* ornithology….

＜これらの外来種〔イギリスすずめ—筆者補足〕の導入は，鳥類学を混乱させる。＞

[Fine and Christoforides 1991: 383 原文中の斜体と訳文中の下線は筆者によるもの]

INFLATION IS AN ENTITY

＜インフレは一つの実体である＞

(b) If there's much *more inflation,* we'll never survive.

＜インフレがもっと増大すれば，われわれは生き残れなくなる。＞

(c) *Inflation is taking its toll* at the checkout counter and the gas pump.

＜インフレはその代価を（スーパーマーケットの）精算所やガソリンスタンドで徴収している。（＝インフレのつけはスーパーで買物をしたり，車にガソリンを入れる時に回ってくる。）＞

(d) *Inflation makes me sick.*

＜インフレは私をむかむかさせる。＞

[Lakoff and Johnson 1980: 訳 38–39]

(e) Yesterday's resignation of Prime Minister Necmettin Erbakan of Turkey *stems from* a conflict, …, over how much freedom to grant Islamic expression and Islamic political parties.

＜昨日の，Necmettin Erbakan トルコ首相の辞任は，イスラム教的表現とイスラム教政党に対してどの程度の自由が与えられるべきかをめぐるコンフリクトから起こっている。＞

[The New York Times 1997 原文中の斜体と訳文中の下線は筆者によるもの]

なお，この次元は，これまでの「メタファー研究」によって見逃されている。

（II） 問題状況の精緻化：ある想定された現下の状態を重大問題として精緻化するために（むろん，それ以前にあるいはそれと同時にその現下の状態は，認知的に問題状況として定義可能な実体的状態にされている，あるいは，される必要がある），クレイム・メーカーは，当然のことながら，その状態にそれ相応の豊かな意味構造を与える必要がある。その際にクレイム申し立て活動の一つの効果的な技法となるのが，上述の「実体」や「容器」

といった単純な物理的概念よりも精細な構造とはっきりした輪郭からなる概念によってそれとは別の概念を豊かに構造化する「構造メタファー」「擬人化」「新しいメタファー」である[14]。クレイム・メーカーは，これらのメタファーを媒介に，ある想定された現下の状態を重大問題として精緻化するべく，その状態をそれとは別のよく知られた問題状況の精細な構造とはっきりした輪郭に結びつける。例えば，イギリスすずめの撲滅派は，擬人化と新しいメタファーを媒介に，イギリスすずめを，既に社会問題化していた新移民と結合することによって，それらを，「アメリカの鳥たちを脅かす，不道徳で，外敵として排除されるべき移民」として認知的・道徳的に性格づけ，重大問題として精緻化することに成功したと言える。なお，この次元は，研究対象が新しいメタファーに偏っているきらいがあるものの，これまでの「メタファー研究」によって集中的に研究されている[15]。

(Ⅲ) 悪化傾向にある問題状況の方向づけ：現下の問題状況が，しばしば，悪化する傾向を見せることがある。クレイム・メーカーは，場合によってはその悪化ぶりに対してクレイムを申し立てることが必要になってくるだろう。その際にクレイム申し立て活動の一つの便利な技法となるのが，「方向づけメタファー」である。クレイム・メーカーは，このメタファーを通じて，悪化傾向にある問題状況の悪化ぶりを際立たせるために，その問題状況の悪化ぶりを方向づけることがある。以下の事例では，「より多きは上」という方向づけメタファーが，インフレと犯罪率の悪化ぶりを「上」に方向づけることによって，その悪化ぶりを鮮明にすることを可能にしている[16]。

Inflation is *rising*.
＜インフレが上昇している＞
The crime rate is *going up*.
＜犯罪率が上昇している＞
[Lakoff and Johnson 1980: 訳 34 原文中の斜体と訳文中の下線は筆者によるもの]

なお，この次元は，これまでの「メタファー研究」によって閑却されている。

ところで，こうした三つの次元のすべてにおいて顕著な社会問題ディスコースのメタファーの作用がある。現下の問題状況を間主観的（説得的）に構成する作用がそれである。こうしたメタファーの間主観化作用（説得力）は，クレイム・メーカーにとっては，クレイム申し立て活動の技法としての，また，社会問題の研究者にとっては，研究対象としての，メタファーの魅力の一つをなす。さて，前々節から，これまでの「メタファー研究」は，こうしたメタファーの間主観化作用の源泉について，断片的で不十分ではあるが，概ね，次の三つの点を明るみに出していることがわかる。(1) 新たに生じつつある問題状況をそれとは別のよく知られた問題状況—慣習的であれ，非慣習的であれ（前者の例：「健康/病気」と「自然/人工」[Schön 1979→1993]; 後者の例：「新移民」[Fine and Christoforides 1991]）—に接合するという点。(2) ハンセン病メタファー（「社会問題ディスコースのメタファー（的表現）」と言い換えてもよい）は，村八分や社会的降格といった他の現象（「メタファーが意味づける現下の問題状況」と言い換えてもよい）を特徴づけるために使用されるので，現存するハンセン病患者をめぐる言説から分離しているという点 [Navon 1996]。(3) メタファーは，アプリオリに経験的現実の真なる描写とは見なされておらず，検証を必要としているとは考えられていないので，ハンセン病メタファーに由来するスティグマ付与メッセージ（「社会問題ディスコースのメタファー（的表現）」と言い換えてもよい）も，「議論に対して抵抗力のある真理」として受け取られているという点がそれである [ibid.][17]。それぞれの点を吟味することによって，社会問題ディスコースのメタファーの間主観化作用（説得力）を再検討してみよう。

まず，Navon が主張する (2) と (3) は，いずれも疑わしい。(2) に関して言えば，ハンセン病メタファーは，ハンセン病をその根源（領域）としているので，現存するハンセン病患者をめぐる言説と結びつく可能性は大いにありうるという点で疑わしい[18]。また，(3) に関して言えば，Lakoff が述べるように，メタファーは，場合によっては経験的現実の真なる記述になりうる [Lakoff 1986: (1)3]（したがって，場合によっては検証を必要としうると考えられているように思われる）という点で疑わしい。それゆえ，今のところ，(2) と (3) は，いずれも受け入れ難い。

次に，とりわけ Fine と Christoforides が主張する (1) は，間違いではないように思われるが，多少説明不足である。上述の (1) から，メタファーの根源となるよく知られた問題状況，すなわち，間主観化された問題状況の慣習的・非慣習的図式と，それを現下の問題状況へと連結する能力，すなわち，写像する能力が，社会問題ディスコースのメタファーの間主観化作用をもたらすということが，ひとまずわかる [cf., Lakoff and Turner

1989: 訳 71-77]。だが，これだけではまだ説明不十分で，本稿の事例となっているいくつかのメタファーの根源，例えば，「インフレが上昇している」という事例の「上」図式といった間主観化された慣習的図式それ自体は，上述のような問題状況図式とは直接的に関連していないこともありうるように思われる。したがって，社会問題ディスコースのメタファーの間主観化作用は，メタファーの根源となる間主観化された問題状況の慣習的・非慣習的図式，並びに，それとは直接的に関連していない慣習的図式（非慣習的図式という場合もありうるかもしれない）と，それらを現下の問題状況へと写像する能力を源泉にしているということになる。

加えて，これまでの「メタファー研究」によって考慮されていないが，ぜひとも考慮されるべき点が，少なくとも，もう一つある。こうした間主観化作用を特徴とするメタファー的写像の作動様式がそれである。この点について，Lakoff の次の見解は，示唆に富む。すなわち，「慣習的概念体系の一部である概念はどれも，自動的に，無意識的に，労力を要さずに使用されている。このことは，非メタファー的概念のみならず，メタファー的概念（例えば，旅としての恋愛という概念）にもあてはまる。新たに作り上げられたメタファー的写像は，意識的に，労力を要して使用されるだろう」[Lakoff 1986: (2)7]。要するに，本稿の用語で言えば，慣習的メタファーの場合には，写像は，自動的で，無意識的で，労力を要さないのに対して，新しいメタファー（非慣習的メタファー）の場合には，それは，非自動的で，意識的で，労力を要するということになる。

社会問題ディスコースのメタファーの間主観化作用（説得力），すなわち，現下の問題状況を間主観的（説得的）に構成する作用について要約すると，次のようになる。(1) 社会問題ディスコースのメタファーの間主観化作用は，①メタファーの根源となる間主観化された問題状況の慣習的・非慣習的図式，並びに，それとは直接的に関連していない慣習的図式と，②それらを現下の問題状況へと写像する能力から生まれてくる。(2) その写像の作動様式は，慣習的メタファーの場合には，自動的で，無意識的で，労力を要さないのに対して，新しいメタファー（非慣習的メタファー）の場合には，非自動的で，意識的で，労力を要する。クレイム・メーカーは，現下の問題状況の間主観的（説得的）構成に貢献するこれらの要素を巧みに結びつけることによって，その問題状況に対する，持続力のあるパースペクティヴを獲得することができるようになるものと思われる。

既存の「メタファー研究」は，本稿がここで俎上に載せてきた，社会問題のメタファー媒介的構築過程の諸次元，並びに，社会問題ディスコースのメタファーの間主観化作用（説得力）といった，いずれの点ついても不十分にしか扱えていない。その理由としては，研究対象が，上述のように，新しいメタファーに偏っていて，慣習的メタファーをほとんど等閑視していること，あるいは，分析概念が未熟であること等が考えられる。本稿は，Lakoff たちのメタファー理論をよすがに，これまでの「メタファー研究」の問題点を露にし，これを少しでも改善することを試みたわけだが，社会問題ディスコースのメタファーについての理解をより一層深めるためには，今後も，言語学等，隣接諸科学の知見を通じて，分析枠組みをよりよいものにしていく必要があることは言うまでもない。

このように，メタファーは，詩的言語にとどまるものではない。社会問題の構築過程の諸側面にも大いに寄与し，現下の問題状況を，それとは別の間主観化された問題状況の慣習的・非慣習的図式，並びに，それとは直接的に関連していない慣習的図式を通じて―慣習的メタファーの場合には，自動的に，無意識的に，労力を要さずに，また，新しいメタファーの場合には，非自動的に，意識的に，労力を要して―，認知的・道徳的に分節化しつつ，間主観的（説得的）に構成し，その問題状況に対する，持続力のあるパースペクティヴを提供する。その意味で，メタファーは，社会問題を定義するという営み，換言すれば，クレイム申し立て活動の有効な技法と言えるだろう。

5. おわりに

レトリックが主題化されてきた社会構築主義の社会問題論を主な背景に，近年，ようやく姿を現し始めた「メタファー研究」は，それなりの成果を収めているものの，ある重大な問題点を抱えていた。なるほど，社会学と詩の間に距離があるために，一見，社会問題とは無関係であるように思われがちなメタファーが，社会問題の構築過程において重要な役割を演じているということを明るみに出す等，その功績は大きい。だが，研究成果の未整理，研究対象の偏り，分析概念の未熟さ等のせいで，社会問題ディスコースのメタファーが現下の問題状況の諸次元に作用し，その問題状況を間主観的（説得的）に作り上げていくメカニズムを部分的に視野に入れているにすぎない。

本稿は，Lakoff たちの認知意味論的メタファー理論

に依拠しつつ，社会問題ディスコースのメタファーの諸相を見通し易くする中で，これまでの「メタファー研究」のこうした問題点を明らかにし，これをわずかでも改善することを試みた。本稿のこうした試みは，これまでの「メタファー研究」と，今後の経験的研究の蓄積，並びに，理論的定式化の洗練との一つの橋渡しと言えるだろう。

とはいえ，本稿に問題点が全くないというわけではない。本稿は，理論的研究に力点を置いてきたので，経験的事例との関連づけが，不足しているきらいがある。例えば，本稿の分析概念となっている四つのメタファー類型は，それだけで十分なのか，また，あるメタファーが，誰にとって，どの程度，慣習的であるのか [Lakoff 1986: (2)7][19]，さらには，メタファーと他のレトリックの関係は，どのようになっているのか等，経験的事例とのさらなる照合を必要とする問題点がいくつかあることは確かである[20]。

われわれは，これらの問題点を念頭に置きつつ，社会問題ディスコースのメタファーという，今なお興味深い研究課題が数多く残されている肥沃な研究領域[21]に分け入る必要があるだろう。

註

1) Ibarra と Kitsuse の言う「社会問題ディスコースのレトリック」という概念 [Ibarra and Kitsuse 1993] を参考にして造った。
2) [e.g., Schön 1979→1993; Gusfield 1981→1984; Best 1987, 1990→1993; Blain 1988; Fine and Christoforides 1991; Conrad and Schneider 1992; Ibarra and Kitsuse 1993; Warren 1993; Elwood 1995; Navon 1996; Kraska and Kappeler 1997]。これらの中には，社会構築主義アプローチによる研究はもちろんのこと，それに準ずる研究も含まれている。
3) 以下の例示は，必ずしも各研究の全体像ではない。
4) 具体的な内容は不明だが，社会的に拒絶された人々をハンセン病患者に喩えたメッセージであるように思われる。
5) 「ハンセン病は，他の病気と同様に，治療可能な皮膚病である」といった内容の言説。
6) (II) [Navon 1996] の (1) と (3) は，それぞれ②と③のようにその他の事例に一般化されうるだろう。これに対して，(2) は，科学的クレイムがメタファー媒介的クレイムの対抗クレイムとなっている事例に特有のものとなっているので，その他の事例に一般化されえないだろう。
7) 以下，訳語は，変更されている場合もある。
8) 各領域は，「図式」(何らかの形で構造化された知—概念やイメージ—[Lakoff and Turner 1989: 訳 73]) からなる。
9) 容器のメタファーは，「内-外」という方向性を有しているので，厳密には，方向づけメタファーと単純な存在論メタファーの複合メタファーである [Lakoff and Johnson 1980: 訳 221]。
10) Lakoff たちのメタファー類型は，一部，曖昧である。例えば，単なる実体概念よりも精緻な構造と明確な輪郭からなる貨幣概念を時間概念に写像する「時間は貨幣である」というメタファーが，構造メタファーに分類されているにもかかわらず，同じく単なる実体概念よりも精緻な構造と明確な輪郭からなる人間概念（例：人間の振る舞い，目標，性格等）を人間以外の対象に関する概念に写像する擬人化が，なぜ，構造メタファーではなく，存在論メタファーに分類されるのか，よくわからない。ただし，こうした欠陥それ自体は，簡単に修正できる（例：擬人化を構造メタファーに属するものとする）ので，Lakoff たちの議論にとってそれほど重大ではないだろう。
11) われわれは，ここで Lakoff たちのメタファー理論と既存の「メタファー研究」の成果が，次の二つの点で符合していることに気づく。一つは，メタファー的表現とメタファー（表層メタファーと深層メタファー）の区別とそれから派生する研究手続き。もう一つは，メタファーの強調効果と隠蔽効果の区別とそれに基づいた研究手続きである。前節 (III)[Schön 1979→1993] を参照。
12) ここでいう想定された状態とは，クレイム・メーカーによって実在すると想定された状態のことで，認知的産物である。
13) from は，「…から外へ」という方向づけを含意している。
14) 新しいメタファーと擬人化は，意味づけの対象に関する概念を豊かに構造化するという点で構造メタファーと似ている。前者に関しては [Lakoff and Johnson 1980: 訳 221] を，また，後者に関しては註 10) を参照。
15) 前々節参照。ここでの詳しい例示は，前々節のそれと重複するところが多くなるので，避ける。
16) これらは，Best の言う「拡大評価 (growth estimates)」[Best 1987: 107-108; 1990→1993: 31] に相当するクレイムと解することができる。なお，拡大評価とは，「事態がますます悪化している，すなわち，問題が拡大し，行動が起こされなければ，さらに悪化するだろうという」クレイムのことである。
17) (2) と (3) に関しては前々節 (II) [Navon 1996] と註 6) を参照。なお，(2) と (3) は，それぞれ前々節第 4 段落の (1) と (3) に，また，同第 6 段落の (1) の②と③に対応している。
18) S. Sontag は，医学の進歩とともに，結核メタファー（に根ざした神話）が終焉したと指摘したり [Sontag 1978/1989: 訳 38-55]，癌メタファーが廃れると予測したりしている [ibid.: 訳 131]。このことは，こうした病気メタファーと，実際の病気や患者をめぐる医学的言説が融合し，後者が前者を根絶しうることを意味している。Navon が取り上げた事例において，ハンセン病メタファーと，現存するハンセン病患者をめぐる言説が分離し，後者が前者を締め出すことに成功していないのは，ハンセン病メタファーが他の現象を特徴づけるために使用されるからというよりもむしろ，Navon 自身の指摘するスティグマ除去キャンペーンのまずさ（例：ハンセン病を恐れるなという，人々へのあからさまなメッセージが，大部分の人々はいまだにハンセン病を恐れているのだという言外のメッセージをほのめかすことになってしまった [Navon 1996: 270]）等，他の要因によるものと思われる。
19) Lakoff たちのように，あるメタファーが慣習的か否かを研究者が最終的に同定することは，厳格構築主義の立場にとって問題となるだろう [Troyer 1993]。なお，厳格構築主義という語は，Best のものである [e.g., Best 1995]。
20) 本稿の分析枠組みとなっている Lakoff たちのメタファー理論の妥当性を疑問視する認知言語学者もいる [e.g., 田中 1995; 深谷・田中 1996]。
21) Ibarra と Kitsuse が「モチーフ (motifs)」と呼ぶ社会問題ディスコースのレトリック（「社会問題のある側面を要約したり，強調したりする，繰り返し現れる主題的要素と比

喩的表現」）には，「疫病」「氷山の一角」「麻薬との戦争」等といったメタファーが含まれている。彼らは，モチーフに関する研究課題として，モチーフの「万能性(versatility)」の問題等，興味深い諸問題を数多く提出している[Ibarra and Kitsuse 1993: 35, 47-48]。

参考文献

Best, J. 1987 "Rhetoric in Claims-Making: Constructing the Missing Children Problem," *Social Problems*, 34 (2): 101-121.

—— 1990→1993 *Threatened Children: Rhetoric and Concern about Child-Victims*. paperback ed. Chicago: The University of Chicago Press.

——ed. 1995 *Images of Issues: Typifying Contemporary Social Problems*. 2nd ed. New York: Aldine de Gruyter.

Blain, M. 1988 "Fighting Words: What We Can Learn From Hitler's Hyperbole," *Symbolic Interaction*, 11 (2): 257-276.

Conrad, P., and J. W. Schneider 1992 *Deviance and Medicalization: from Badness to Sickness*. expanded ed. Philadelphia: Temple University Press.

Elwood, W. N. 1995 "Declaring War on the Home Front: Metaphor, Presidents, and the War on Drugs," *Metaphor and Symbolic Activity*, 10 (2): 93-114.

Fine, G. A., and L. Christoforides 1991 "Dirty Birds, Filthy Immigrants, and the English Sparrow War: Metaphorical Linkage in Constructing Social Problems," *Symbolic Interaction*, 14 (4): 375-393.

深谷昌弘・田中茂範 1996『コトバの〈意味づけ論〉—日常言語の生の営み—』紀伊國屋書店.

Gusfield, J. R. 1981→1984 *The Culture of Public Problems: Drinking-Driving and the Symbolic Order*. paperback ed. Chicago: The University of Chicago Press.

Holstein, J. A, and G. Miller eds. 1993 *Reconsidering Social Constructionism: Debates in Social Problems Theory*. New York: Aldine de Gruyter.→[RSC]

Ibarra, P. R., and J. I. Kitsuse 1993 "Vernacular Constituents of Moral Discourse: An Interactionist Proposal for the Study of Social Problems," pp. 25-58 in RSC.

Johnson, M. 1987 *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Chicago: The University of Chicago Press.（菅野盾樹他訳，1991，『心のなかの身体—想像力へのパラダイム転換』紀伊國屋書店.）

Kraska, P. B., and V. E. Kappeler 1997 "Militarizing American Police: The Rise and Normalization of Paramilitary Units," *Social Problems*, 44 (1): 1-18.

Lakoff, G., and M. Johnson 1980 *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.（渡部昇一他訳，1986，『レトリックと人生』大修館書店.）

Lakoff, G. 1986 *Two Metametaphorical Issues: (1)The Meanings of Literal (2) A Figure of Thought*. Cognitive Science Report, no. 38, Institute of Cognitive Studies, University of California, Berkeley.

——1987 *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.（池上嘉彦他訳，1993，『認知意味論—言語から見た人間の心』紀伊國屋書店.）

——and M. Turner 1989 *More Than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: The University of Chicago Press.（大堀俊夫訳，1994，『詩と認知』紀伊國屋書店.）

——1993 "The contemporary theory of metaphor," pp. 202-251 in MT.

メタファー研究会 1995『意味の創造と変容—Creation and Reframing of Meaning through Metaphor—』慶應義塾大学言語コミュニケーション研究所.→[『意味』]

Navon, L. 1996 "Beyond constructionism and pessimism: theoretical implications of leprosy destigmatisation campaigns in Thailand," *Sociology of Health & Illness*, 18 (2): 258-276.

Ortony, A., ed. 1979→1993 *Metaphor and Thought* 1st ed. →2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press.→[MT]

Schön, D. A. 1979→1993 "Generative Metaphor: A Perspective on Problem-Setting in Social Policy," pp. 137-163 in MT.

Sontag, S. 1978/1989 Illness as Metaphor/ AIDS and Its Metaphors. New York: Farrar, Straus and Giroux.（富山太佳夫訳，1992，『新版 隠喩としての病い/エイズとその隠喩』みすず書房.）

Spector, M., and J. I. Kitsuse 1977 *Constructing Social Problems*. California: Cummings Publishing Company.（村上直之他訳，1992，『社会問題の構築—ラベリング理論をこえて—』マルジュ社.）

田中茂範 1995「隠喩の意味づけ論的展開—《表現として》の隠喩と《潜在過程として》の隠喩—」『意味』所収 37-88 頁.

The New York Times 1997 "Outlawing Islam," September 19.

Troyer, R. J. 1993 "Revised Social Constructionism: Traditional Social Science More Than a Postmodernist Analysis," pp. 117-128 in RSC.

Warren, C. A. B. 1993 "The 1960s State as Social Problem: An Analysis of Radical Right and New Left Claims-Making Rhetorics," pp. 59-86 in RSC.